

赤ちゃんといっしょにつくる“意味”の世界

第2回



鳥取大学

寺川志奈子

てらかわ しなこ／鳥取大学地域学部教授。著書に『教育と保育のための発達診断』（共著、全障研出版）、『「自分づくり」を支援する学校—「生活を楽しむ子」をめざして』（共編著、明治図書）など。



●持つる力を発揮してやっぴりぽん

赤ちゃんとのコミュニケーションは、赤ちゃんが言葉を獲得する前から始まっています。このことについて、京都大学霊長類研究所の正高信男さんは、ヒトの赤ちゃんならではの興味深い行動を示しています。

チンパンジーをはじめ、哺乳動物の赤ちゃんはミルクを与えられると、ミルクがなくなるまで一気に飲み干してしまいます。ところが、生後間もないヒトの赤ちゃんは、それとは違って、乳首をしばらく吸っては休み、またしばらく吸ってはまた休む、といった具合に、**「休み」**を入れるのが特徴的なのだそう。エネルギーを摂るといった観点からすると、休みを入れない方が効率的なはずなのですが、ヒトの赤ちゃんはエネルギーを摂ることを犠牲にしてまでも、**「休み」**を入れるのだそうです。なぜなのでしょう？

赤ちゃんが吸うのを休むと、お母さんは赤ちゃんのからだをやさしく揺すってみたり、「よしよし」と声をかけたりします。驚くことに、こうしたお母さんからのかわりに期待して求めるかのように、ヒトの赤ちゃんは、わざわざ自ら**「休み」**を入れていると解りできるのだそうです。**「休み」**を入れては、お母さんから反応を返してもらって、赤ちゃんはまた吸いはじめます。実際のところは、お母さんはあまり意識をせずに吸うのを止めた赤ちゃんを揺すったりしています。ところが、もしもお母さんが、反応を返さなかったらどうなるかというと、赤ちゃんはもう吸う

ことを止めてしまうなど、お母さんとのやり取りのリズムは崩れてしまうらしいです。さらに、生後2カ月くらいになって、クーイングと呼ばれるやさしい声を出せるようになる、赤ちゃんは**「休み」**を入れてもお母さんからの反応がないと、まるで自分にかまわってちょうだいと要求せんばかりに、「アー」とか「クー」とかの声をあげるのだそうです。

生まれたばかりの赤ちゃんは、おっぱいを介してお母さんとコミュニケーションをとっているのです（ちなみに、哺乳瓶でミルクをあげた場合も、同じ結果なのだそうです）。

この話を読んで思い出したのが、娘が4カ月のときのエピソードです。座布団のなかにちょこんとおさまってお昼寝していたからだも、ふくふくと大きくなり、座布団の対角線上に寝かせないとみ出してしまおうようになってきたころです。お世辞にも子どもとかかわるのが上手とは言えない、堅くてまじめな銀行員だったおじいちゃんが、寝転がっている娘と目が合って、ふっと気持ちが動いたのか、「べろべろべつ」とちよつときこちなくあやしかけました。すると、おじいちゃんの顔をじーっと見つめていた娘は、「べろべろべつ」の後、一瞬の間があつてから「ホエー」と声をあげました。それに気をよくしたおじいちゃん、またもや「べろべろべつ」とやってみます。娘は、今度は目と口元に微笑みを浮かべながら、さっきよりも高い大きな声で「キヤー」と返しました。そしてまた、じーっとおじいちゃんの顔を見続けます。うれしくなってきたおじいちゃん、「べろべろ

べろべろべつ」と少しだけ勢いのある変化をつけてみます。ほとんど瞬きもせずにおじいちゃんを凝視する娘の、「キヤー」と発する声のトーンもさらに上がっていました。「べろべろべつ」「キヤー」、そんなふたりの声のキャッチボールは7、8回ほど続いたでしょう。周りにいた大人たちにも、思わず笑顔がひろがる時間でした。

●ふたりのあいだの「身振りうごき」

乳児期後半になると、赤ちゃんの人とかかわりたいねがいは、いっそうはつきりとあらわれてきます。手遊びをお母さんと楽しむ赤ちゃんの様子をみましょう。6カ月のとき、なつちゃんは、お母さんの「トトマトはトントントン、キヤベツはキヤキヤキヤ、大根はコンコンコン♪」の歌に合わせて、お腹や胸や足をやさしくこちょこちよされたその瞬間に、「キヤハッ」とくすぐったくてたまらないという感じの声をあげながら、うれしそうな笑顔をみせていました。お母さんのお膝で、温もりを感じながらやさしい歌声につつまれて、触れられた感覚その瞬間の心地よさが、なつちゃんの楽しさのようでした。

ところが、なつちゃんが8カ月になると、その楽しさの味には変化がみられます。「トっぽんばしこちよこちよ♪」の歌がはじまると、なつちゃんは、片方の腕をあげたお母さんの顔をみながら、歌に合わせてからだを揺すってにこにこしています。それが、いよいよ「トかいだんのほって♪」のくだりになると、まだ「こちよこちよ」される前か

ら、あずけていた腕を引つ込めようとしたり、腕をのぼってくるお母さんの手をもう一方の手で押し返そうとしたりします。なつちゃんは、これからやってくる「こちよこちよ」を予期しているのです。そしてとうとう「こちよこちよ」がやってくる、くすぐったさに身をよじった後、なつちゃんがみせたのは、「うんうんうん」と頭を大きく揺らしてうなづく姿でした。このかわいい仕草には、どんな意味があるのでしょうか？ そのとき、お母さんは「できたあ。できた、うん、うん」という言葉でなつちゃんのうなづくきを受け止めました。お母さんの言葉から、なつちゃんのこのうなづくきは、待つていた「こちよこちよ」ができた！ という、うれしさを表現していたのではないかということが想像されました。

8カ月になると、なつちゃんの楽しさは、6カ月のころの心地よい感覚そのものだけではなく、いつものあの「こちよこちよ」がやってくるぞ！ という期待感や、それが本当にやってきた後の満足感みたいなものが加わっています。なつちゃんの心のなかには、お母さんとの「いっぽんばしこちよこちよ」の楽しいイメージ（「表象」と呼ばれます）が、記憶として残されはじめていることがうかがえます。この記憶があるから、赤ちゃんは相手に期待して待ったり、もう1回と次を要求したりすることがみられるようになっていきます。そしてこの記憶は、大好きな人といっしょの心地よい時間が繰り返されるなかで、つくられてくるものなのでしょう。